話す能力を育てるための試み

― 初級後半コースにおいて ―

小野寺　志津

要　旨

本稿は、『Situational Functional Japanese』の 19 課から 24 課を学習する J400 コースにて平成 19 年度 1 学期、話す能力を育てるための試み（以下教室内での呼び名「日本語で話そう」と記す）を行った授業の報告である。これは、J400 コースのみが恒常的に取り入れている活動であり、その目的は学生が蓄えてきた日本語の知識をいかに活性化させ生産させるかということにある。「日本語で話そう」を通じ、学生は 1）自発的に発話しようとし、2）新たな日本語の表現を知ることができ、3）自分の日本語がどのように相手に聞こえ、理解されるかという気付きを得ることができた。

【キーワード】会話　話す能力　日本語の知識の活性化　自発的な発話　発音の気付き

Attempt to Foster Speaking Ability : in the J400 (adv. beginners)course

ONODERA Shizu

【Abstract】This is a report on the J400 course (using『Situational Functional Japanese』L.19～ 24) in the first term of 2007, dealing with an attempt to develop students' speaking ability (called "Let's speak in Japanese" in the classroom). "Let's speak in Japanese" is an original activity of the J400 course, and has the purpose of activating the latent Japanese knowledge of the students have. As a result, the students managed to achieve the following; 1) they tried to utter Japanese voluntarily, 2) learned new Japanese expressions, and 3) became aware of problems regarding their pronunciation.

【Keywords】conversation, speaking ability, activation of Japanese knowledge, voluntary utterance, awareness of pronunciation

1.　はじめに

筑波大学留学生センターでは平成19年度から、初級日本語を学習するコースとして日本語補講J100～J400までの4コース、中級以降を学習するコースとしてJ500～J700の3コースを設けた。J100～J400コースでは、教科書は『Situational Functional Japanese』（以下『SFJ』と略す、 Vol.1～3、全24課）を使用し、各コースで6課ずつを学習する。本稿では、『SFJ』の19課から24課を学習するJ400コースにて平成19年度1学期に行った話す能力を育てるための試み（以下教室内での呼び名「日本語で話そう」と記す）を取り入れた授業の報告を行う。

2.　J400コースの概要と目標

J400コースは週5コマ／1コマ75分、各学期10週行われるコースで、『SFJ』Vol.3の19課から24課を使用している。聞き取り練習には『わくわく文法リスニング99』を適宜使い、希望者はMP3を手に入れて自主学習することができるようになっている。コース半ばには中間試験として19課から21課まで、学期末には19課から24課の筆記試験とリスニング試験を行う。口頭表現能力は、オーラルテスト2回とディベートで評価する。オーラルテストは既習の表現形式を利用してペアでスキットを創作して行う。ディベートはSFJの24課で意見述べを学習するので、それを利用して行う。宿題は各課のはじめに「Grammar check」、各課の終わりに「Sentence Writing」、「Review Sheet」等を課し、以下の基準で成績をつける。

・中間テスト：30%
・期末テスト：30%
・オーラルテスト（2回）：20%
・ディベート：10%
・授業態度：10%

コースの目標は次の通りである。

(1)　日常的で具体的な話題についてコミュニケーションができる。
(2)　500字ぐらいの漢字を使って、簡単な日本語を読んだり書いたりすることができる。
(3)　日本語で簡単なスピーチをすることができる。

平成19年度1学期の登録者数は26名で、漢字圏、非漢字圏学習者が混在しており、スケジュールは次の通りである（表1）。

〈表 1：J400 コーススケジュール〉

週目	月日	曜日	授業内容	宿題
	4 月 20 日	金曜日 1 時間目	復習 L17 grammar わくわく 62,63,64,65	
1 週目	4 月 23 日	月曜日 4 時間目	復習 L18 grammar わくわく 66,67,68,	GC17,18
	4 月 24 日	火曜日 4 時間目	復習 L18 grammar わくわく 69,70	
	4 月 25 日	水曜日 4 時間目	L19 SD 1,2,3,4	GC19
	4 月 26 日	木曜日 1 時間目	L19 SD 5,6,7　わくわく　71,73	
	4 月 27 日	金曜日 1 時間目	L19 MC,CD visiting	
2 週目	4 月 30 日	月曜日 4 時間目	休み	
	5 月 1 日	火曜日 4 時間目	L19 Role play	
	5 月 2 日	水曜日 4 時間目	L19 Task & Activities 1,2	W19
	5 月 3 日	木曜日 1 時間目	休み	
	5 月 4 日	金曜日 1 時間目	休み	
3 週目	5 月 7 日	月曜日 4 時間目	L20 SD 1,2,3,4 わくわく 74	GC20
	5 月 8 日	火曜日 4 時間目	L20 SD 5,6　わくわく 76	
	5 月 9 日	水曜日 4 時間目	L20 SD 7,8,9　　わくわく 75	
	5 月 10 日	木曜日 1 時間目	L20 MC, CD	
	5 月 11 日	金曜日 1 時間目	L20 Role Play	
4 週目	5 月 14 日	月曜日 4 時間目	L19&L20 Oral test preparation	W20
	5 月 15 日	火曜日 4 時間目	L21 SD 1,2,3,4　わくわく 81	GC21
	5 月 16 日	水曜日 4 時間目	**日本語で話そう** L20 Task & Activities 1	
	5 月 17 日	木曜日 1 時間目	L21 SD 5,6,7,8　わくわく 78	
	5 月 18 日	金曜日 1 時間目	L21 SD 9,10,11,12　わくわく 79,　80	
5 週目	5 月 21 日	月曜日 4 時間目	L19&L20 Oral test	
	5 月 22 日	火曜日 4 時間目	L21 MC, CD	
	5 月 23 日	水曜日 4 時間目	L21 Role Play　わくわく 81	W21
	5 月 24 日	木曜日 1 時間目	L21 Task & Activities 3,4	
	5 月 25 日	金曜日 1 時間目	L19-L21 Midterm Test	
6 週目	5 月 28 日	月曜日 4 時間目	L22 SD 1,2,3,4 わくわく 82	GC22
	5 月 29 日	火曜日 4 時間目	L22 SD 5,6,7 わくわく 83	
	5 月 30 日	水曜日 4 時間目	L22 SD 8,9,10,11 わくわく 84,85	
	5 月 31 日	木曜日 1 時間目	L22 MC CD Role play わくわく 86,87	

	6 月 1 日	金曜日 1 時間目	**日本語で話そう**	W22
7 週目	6 月 4 日	月曜日 4 時間目	L21& L22 Oral test preparation	
	6 月 5 日	火曜日 4 時間目	L23 SD 1,2,3,4,5 わくわく 90,91	GC23
	6 月 6 日	水曜日 4 時間目	L23 SD 6,7,8,9 わくわく 89	
	6 月 7 日	木曜日 1 時間目	L23 SD 10,11 Tasks & Activities 3, 4	
	6 月 8 日	金曜日 1 時間目	L23 MC, CD わくわく 92,93	
8 週目	6 月 11 日	月曜日 4 時間目	L23 Role Play	
	6 月 12 日	火曜日 4 時間目	L21&L22 Oral test	
	6 月 13 日	水曜日 4 時間目	**日本語で話そう**	W23
	6 月 14 日	木曜日 1 時間目	L24 SD 1,2,3,4 わくわく 96	GC24
	6 月 15 日	金曜日 1 時間目	L24 SD 5,6,7 わくわく 94	
9 週目	6 月 18 日	月曜日 4 時間目	L24 SD 8,9, わくわく 95	
	6 月 19 日	火曜日 4 時間目	L24 MC, CD	
	6 月 20 日	水曜日 4 時間目	L24 Role Play	
	6 月 21 日	木曜日 1 時間目	**日本語で話そう**	W24
	6 月 22 日	金曜日 1 時間目	L24 Task & Activities 3	
10 週目	6 月 25 日	月曜日 4 時間目	発表準備　debate preparation	
	6 月 26 日	火曜日 4 時間目	L22-L24 Final Test	
	6 月 27 日	水曜日 4 時間目	Final Test Feed-back	
	6 月 28 日	木曜日 1 時間目	発表準備　debate preparation	
	6 月 29 日	金曜日 1 時間目	発表　　debate	

3. 「日本語で話そう」の目的

「日本語で話そう」は、筑波大学留学生センターにおいて SJ3-1、3-2 コース（現補講 J300 コース終盤および J400 コース）や集中コースにおいても適宜取り入れていた活動である。補講コース改定に伴い J400 コースでは恒常的に取り入れることにした。これまで学生は場面機能別シラバスに則った SFJ に沿った学習を積み重ねてきている。SFJ では Structure Drills（構造練習）と Conversation Drills（会話練習）で言語形式を学ぶことになる。例を挙げると 22 課では病院という場面において、お見舞いという機能を果たすためにはどのような言語形式が必要かを学習する。以下に 22 課の学習項目 5 つとそれに沿った練習の一部を抜粋する。

1）　使役（予想される発話：みんなを心配させました、など）

　　練習）子どもが笑う→子供を笑わせる。

2）～てしまう（予想される発話：足の骨を折ってしまいました、など）

練習）A：どうしたんですか。

B：パスポートを落としてしまったんです／落としちゃったんです。

3）～らしい（予想される発話：鈴木さん、入院したらしいですよ、など）

練習）Q：あの映画はどうですか。

A：〇〇さんから聞いたんですが、おもしろいらしいですよ。

4）～んじゃないかと思う（予想される発話:入院生活はたいくつなんじゃないかと思う、など）

練習）A：あの、これ、お見舞いなんですけど。

B：あ、これはどうも。

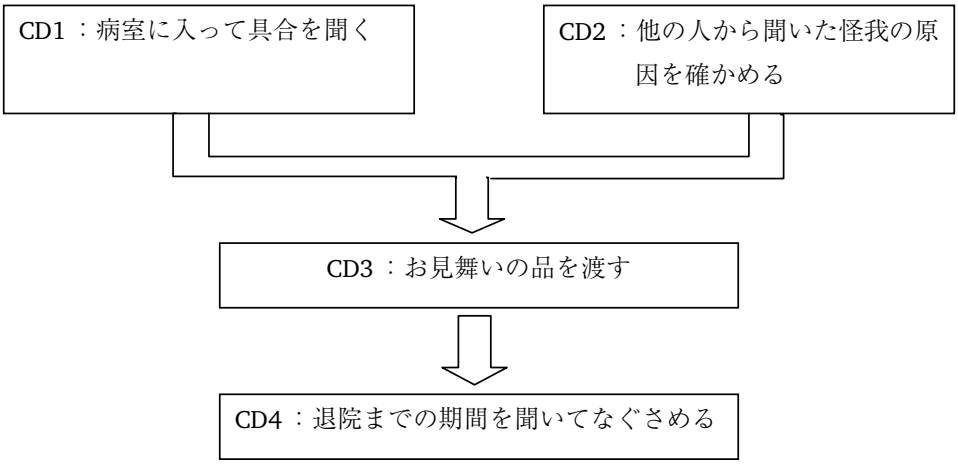
A：音楽テープなんです。たいくつなさってるんじゃないかと思いまして。

5）あと＋時間／数量など（予想される発話:あと一週間ぐらいで退院できると思います、など）

練習）A：もうすぐ終わりますか。

B：ええ、あと１時間ぐらいで、終わると思います。

クラス内では各項目について上記に抜粋したような練習をしている。さらに課の最後には、「Conversation Drills（以下「CD」とする）」として、病室に入ってから出るまで以下のようなフローチャートが示されており、これに沿った会話をすれば「見舞い」という機能を果たすことができるようになっている。



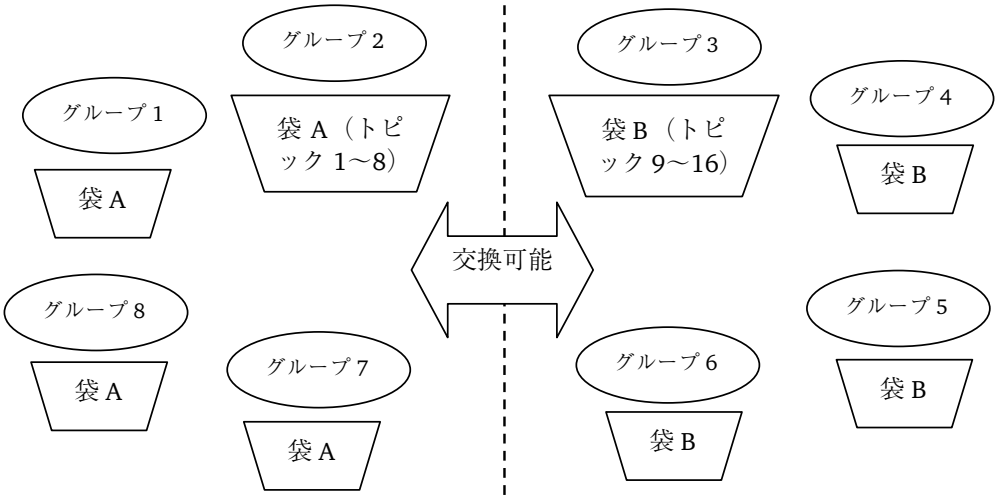
しかし、各CDの間に混じる雑談、例えば自分が過去に入院した時の話をするというような、一人である程度まとまった話をする練習はしていない。そこで、初級段階の総仕上げとも言えるJ400コースではこれまで蓄えてきた日本語の知識をいかに活性化して生産

するかという運用力の向上を目指して、「日本語で話そう」という活動を取り入れることにした。

4. 「日本語で話そう」の方法

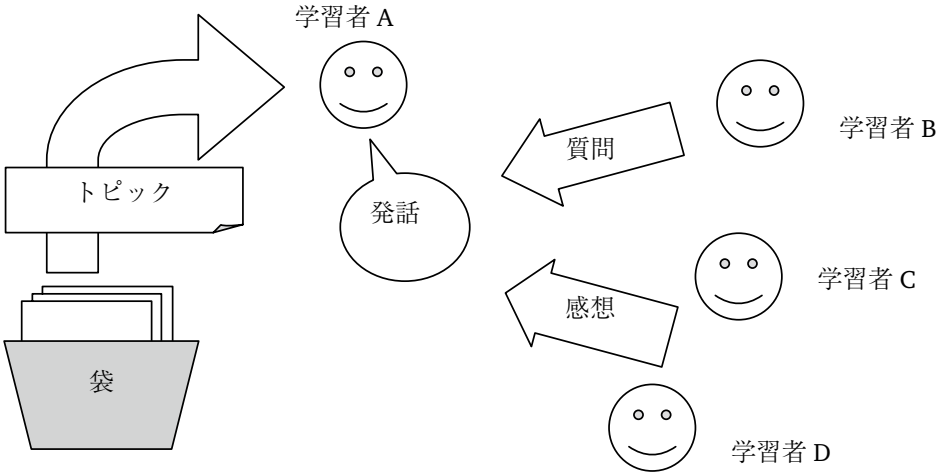
以下、学生26人を8グループに分けて行う場合の方法を記す。

1) トピックを書いた小さい紙を入れた袋を用意する。トピックは以前から筑波大学留学生センターにおいて同じような活動をする際に、教師たちが考案し共有してきたものである（表2）。
2) 学生を、3人のグループ6つと4人のグループ2つの計8グループに分ける。
3) 8グループのうち、4グループに袋A（トピック1～8を入れたもの）、残り4グループに袋B（トピック9～16を入れたもの）をひとつずつ渡す。会話の進み具合に応じて袋Aと袋Bを交換してもよい。これを図にすると次のようになる（図1）。



〈図1：「日本語で話そう」の方法1〉

4) 学生は一人ずつ順番に袋の中を見ないでくじを引くように用紙をひき、そこに書かれているトピックを読み上げる。どのようなトピックがあたるか分からず、ゲームのような緊張感を持つようである。そのトピックがどうしても気に入らないときには1回だけ再度用紙を取ることを許す。
5) 各人のトピックが決まったら少し考え、1分程度にまとめて順番に話す。話し終えたら他の学生の質問に答えたり感想を聞くなどの自由会話を経て次の学生の話に移る。この各グループ内のやりとりを図にすると次のようになる（図2）。



〈図２：「日本語で話そう」の方法２〉

３～４人のグループで行う以上の活動はいわば第一ラウンドで、次に各グループの中から面白い話をした人を選んでもらい、全員の前で同じ話をしてもらう。これが第二ラウンドにあたる。第一、第二ラウンドを１コマの授業の中で２～３回繰り返す。これを、グループやトピックを変えながら１学期に４回行った。

〈表２：日本語で話そうトピック〉

＊トピック作成（筑波大学留学生センター）

1	今、いちばん行きたい国はどこですか。
2	子供のときの恐かった話をしてください。
3	子供の時叱られた話をしてください。
4	日本にはない、私の国の「いいもの」について話してください。
5	宇宙旅行に行ってみたいですか。
6	はじめて筑波大学に来た日のことを話してください。
7	鎌倉の旅行のとき、一番印象に残ったことを話してください。
8	あなたの国では、どんな外国料理が人気がありますか？
9	あなたの国では本屋で立ち読みをしてもだいじょうぶですか？
10	日本にはいろいろな自然災害があります（台風とか地震とか）。あなたの国ではどんな災害が多いですか？
11	買うとしたら、どんなコンピュータを買いたいですか？
12	どんな家でも買えたら、どんな家がいいですか？
13	キャンパスバスについて話してください。

14	休みが１年あったらどうしますか？
15	旅行したとき何か失敗したことがありますか？
16	時計は正確な時間に合わせますか？少し進めますか？
17	日本の若者の印象を話してください。
18	日本のお寺の印象を話してください。
19	自分のことをせっかちだと思いますか。のんびりやだと思いますか。
20	あなたの国で、人気のある職業はなんですか。
21	早起きですか。それとも朝ねぼうですか。
22	どんな母親が理想ですか。
23	どんな父親が理想ですか。
24	どうして日本に来たのですか。
25	あなたの国の国旗について話してください。
26	あなたの国では、かぜをひいたとき、何を食べますか。何を飲みますか。どうしますか。
27	健康のためにどんな注意をしていますか。
28	旅館のふとんはどうでしたか。
29	子供のころ、学校で先生にしかられた話しをしてください。
30	雪が降った日について話してください。
31	海に行きたいですか。山に行きたいですか。
32	もし人間に手が４本あったら、生活が変わっていると思いますか。
33	人間は普通、何か／何を恐れていますか。
34	あなたの国の料理はどこで食べたらいいですか。いい店を教えてください。
35	筑波大学の図書館について話してください。
36	日本に来てから、自分が変わりましたか。
37	きらいな動物は何ですか。
38	あなたの国の学生宿舎について話してください。
39	子供のとき、家の手伝いをしましたか。
40	勉強しながら、音楽を聞いたり、テレビを見たりしますか。
41	あなたの部屋のとなりの人について話してください。
42	あなたの国のバスの乗りかたは日本と違いますか。
43	雨はきらいですか。
44	小学校の生活はどうでしたか。
45	１時間、授業がなくなったら、何をしますか。
46	あなたの国では、昼休みはどんなことをしますか。
47	日本に来てから楽しかったことを一つ話してください。

48	国の友だちがつくばに来たら、どこに案内しますか。
49	好きな動物は何ですか。
50	お皿の上に色々な食べ物があるとき、好きなものから食べますか。あまり好きじゃないものから食べますか。
51	テレビと電話と本の中で、ないと一番困るものは何ですか。
52	この教室にどんなものがあったらいいと思いますか？
53	日本にはチップの習慣はありません。あなたの国ではどうですか。
54	犬と猫とどちらが好きですか。
55	ひまなとき、どこに行きたいですか。
56	日本語のクラスは何時から何時までがいいと思いますか？
57	何歳のときにもどりたいですか。
58	自分の国を出る前の日、何をしましたか。
59	一番幸せだと思うのはどんなときですか。
60	もらって意外だったプレゼントは何ですか。
61	世界の中のだれと会いたいですか。
62	歴史の中のだれと会いたいですか。
63	自転車はどこで買いましたか。
64	よく買い物に行く店はどこですか。

5. 「日本語で話そう」における学習者の言語行動

この活動で学生は次のような気付きを得ている。

1) 袋からひいたトピックの文を読むことで、新たな表現や単語を知ることができる。

2) 他の学生の日本語を聞き、新たな表現や単語を知ることができる。

上記のいずれも、辞書を引き、グループ内で表現や単語や文の意味を確認しあう姿がよく見られた。

3) 自分の日本語が他の学生にどのように聞こえているかが分かり、発音の弱点を知ることができる。例えば、トピック６「はじめて筑波大学に来た日のことを話してください」では、あるグループで次のようなやりとりがあった。学習者Ａは韓国人、学習者Ｂはスイス人である。

学習者Ａ：私が初めてちゅくばに来た時、雨でした。ちゅくば大学は広くていい大学ですが、古いので･･･とても暗かったです。

学習者Ｂ：あの、「ちゅくば」じゃなくて「つくば」でしょう。

学習者Ａ：え？ああ、すみません。韓国人はみんな「つ」（ノートに「つ」と書きながら）という発音がうまくないです。韓国語にありませんから･･･。

学習者Ｂ：ああ、そうですか。分かりました。

この会話で、学習者 A が自分の発音に問題があったと気付くだけでなく、学習者 B も韓国人学習者は「つ」の発音が苦手であるということを知識として得ることができた。また、別グループのトピック 4「日本にはない、私の国の「いいもの」について話してください」では次のようなやりとりがあった。学習者 A は中国人、学習者 B はアメリカ人である。

学習者Ａ：日本にもありますが、私の国はいーががとても安いです。

学習者Ｂ：‥‥‥ そうですか（辞書をひきながら）。

学習者Ａ：だから、みんなはいーがをたくさん見ます。

学習者Ｂ：あの、すみません。「いーが」はなんですか。

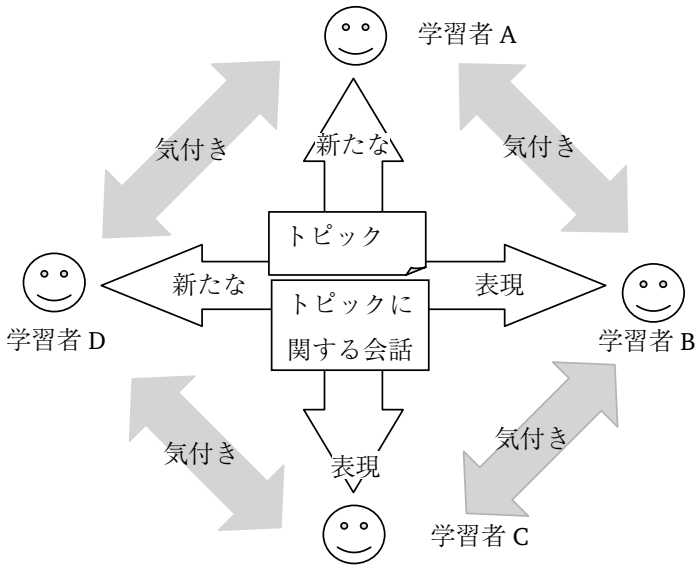
学習者Ａ：いーがは「movie」（言いながら漢字を書いて見せる）。

学習者Ｂ：ああ！分かった、映画ですね。

学習者Ａ：そうそう、えいが、えいが‥‥（繰り返す）。

発音にはそれぞれの母語の影響が出るため、同じ国の学生の日本語は聞き取りやすくても国が異なると途端に聞きにくくなることがある。異なる母語を持つ多国籍のクラスだからこそ、自分の発音が会話の妨げになってしまうことに気付くことができる。

このように、活動の中で自分の日本語の足りない部分に気付き、身振り手振り、文字や絵などでどうにかして補おうとする姿が見られた。以上のことを図にすると次のようになる（図 3）。



〈図３：学習者の言語行動 1〉

また、一人では発話を続けることができなくても、他の学生から質問を受けそれに答えることで話す内容が増え、最終的にある程度まとまった発話へと繋げることができる。先に挙げた、トピック４「日本にはない、私の国の「いいもの」について話してください」の会話は、学習者Ａが「映画」の発音に気付きを得たところで終了に見えたが、以下のように続いていく。学習者Ａは中国人､学習者Ｂ､Ｃはアメリカ人､学習者Ｄは台湾人である。

学習者Ｃ：あの、中国の映画はいくらですか。

学習者Ａ：日本のお金で600円ぐらいです。

学習者Ｃ：え、本当に。安いですね。

学習者Ａ：はい。だから、みんなたくさん映画を見ます。

学習者Ｄ：あの、中国には映画館がたくさんありますか。

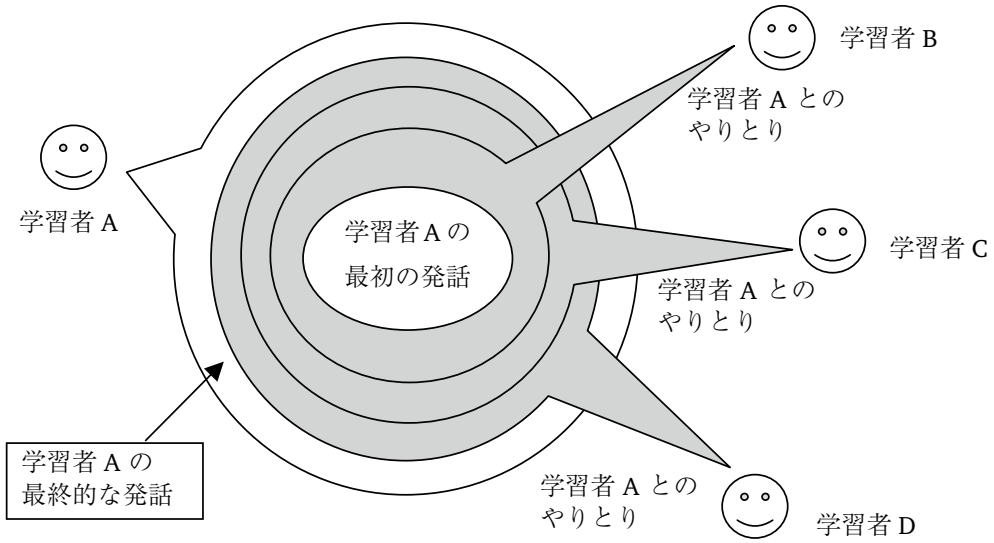
学習者Ａ：北京には･･･私は北京に住んでいました。北京にはたくさんあります。外国の映画も、最近はたくさん見ることができます。家族や友達と一緒に見ます。

学習者Ｂ：アメリカの映画も見ることができますか。

学習者Ａ：はい。私はアメリカの映画が好きです。たくさん見たことがあります。（学習者ＢとＣに）中国の映画を見たことがありますか。

学習者Ｃ：あ、私は見たことがあります。アメリカにいた時･･･（後略）。

このように、他の学習者からの質問に答えることにより、学習者Ａの発話は徐々に長くなり、内容も豊富になっている。これを図にすると次のようになる（図4）。



〈図４：学習者の言語行動２〉

〈図4〉に示したように、学習者Aの最初の発話はグループ内でのやりとりを経て最終的な発話へと膨らむ。これが前項「4.「日本語で話そう」の方法」で述べた第一ラウンドにあたる。次に、全員の前で第二ラウンドとして同じ話をするが、その際、学習者Aは第一ラウンドの最終的な発話をさらによいものにしようと試みるようだ。先に挙げた、トピック4「日本にはない、私の国の「いいもの」について話してください」を話し合っていたグループでは、学習者Aは第二ラウンドで話す機会を得られなかった。しかし、第一ラウンド終了間近に教師が近づき、何を話しているのかたずねると学習者Aはこう答えた。

学習者A：日本にはないいいものの話です（トピックを見せながら）。ええと、私のふるさとは北京です。北京には映画館がたくさんあります。えー、日本にも映画館はありますが、北京の映画館は日本より安いです。だいたい600円ぐらいで…（後略）。

トピックを引いた直後、学習者Aの発話は「私の国は映画がとても安いです」だけであった。それが、グループで話した後には、出身地が北京であることをまず話し、北京の映画館が日本の映画館に比べてどのようにいいものなのか、分かりやすくまとめて話している。おそらくこの学習者は機会があれば、クラス全員の前でも同じように話しただろう。このように学習者は、第二ラウンドでは、第一ラウンドで得られた最終的な発話と同じもの、あるいはそれ以上にまとまったスピーチができるようになるのではないかと考えられる。

「日本語で話そう」を授業に取り入れた最も大きな収穫は、聞くだけでなく自らもこのトピックで話したいという欲求を学生が抱いたり、お互いに発話を促したり、詳しく相手の話を引き出そうとするなど、トピックをきっかけに自発的な会話が次々と生まれることである。この自発的な会話こそが「日本語で話そう」の最大の目的で、学生はこれまでの知識を自ら活用して積極的に会話に参加するようになった。準備した上でのスピーチももちろん重要だが、日常生活において常に発話を準備することはできない。そのような場面においても臆することなく、ある程度まとまった考えを述べる訓練になったのではないだろうか。またこの活動は、コースの最後に行うディベートにもプラスの影響を与えたようだ。元からディベートを知っている学生だけでなく、そうでない学生も「日本語で話そう」の活動で話すことに慣れると、自分の意見を述べるだけでなく、相手の意見を聞いてすぐに質問ができるようになるなど、発話に対して前向きな姿勢が持てるようになったのではないかと考える。また、この活動でお互いに助け合ってコミュニケーションをとるうちに、クラスとしてのまとまりが出てきたのは思わぬ副産物だった。

4.　反省と今後の課題

平成19年度1学期の授業を振り返って、「日本語で話そう」を導入した目的、これまで

蓄えてきた日本語の知識を活性化するという目的はほぼ果たせたと考える。しかし、これを口頭表現能力評価のために行うディベートに、もっと明確に繋げたほうがよかったのではないかという反省点が見えてきた。そうすることで、学期中に行った「日本語で話そう」の活動に明確なゴールが設けられるのではないかと考えるからだ。これを踏まえ、平成 19 年度 2 学期の「日本語で話そう」は最終的にディベートに繋げることを念頭に行った。しかし、ディベートの場で意見を述べることはできても、短い時間内にまとめることができない学生が多かった。また、意見を述べることに集中してしまい、一度相手の意見に同意し、その後で自分の意見を述べるという反論の方法を忘れてしてしまう場面も見られた。以上のことから、今後は「日本語で話そう」の中に、話す時間を決めるなどの変化を持たせたり、コミュニケーションを損なうことなく相手の意見に反論する方法を考える時間を設けてみようと考えている。

参考文献

川口義一（2004）「表現教育と文法指導の融合　－「働きかける表現」と「語る表現」から見た初級文法－」『Journal CAJLE』Vol.6, Canadian Association for Japanese Language Education：57-70